



8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9

文庫20
109

春露集

上



伊地知氏書冊



やあらわの事へあらはうとがふひきの筆の
ことわざてり國をよそひゆつてはるわ
みだらまとの内へくわを破てたまひ
ゆきじらまはよどれをよむのへんい、
きるはれりけわまわせのとあめいたのを
もとめくとあてぬとまほりあめくら
國をよしめとひくは思ふと感ゆる人面と化
すのにあらまことに地をまこ應きよ

三條亞相手書
本ノ一まの下
がる比ニ京あり

アラシのあらしに清流の瀧を清風のひれ流
るのれとて拂て氣香り重なる。たれの軍
のまかと女雄の國の空港と威。百萬の
行はれぬくのすらぬは山陽西國のあまむ
左の祖の城の廣瀬のふくらみの御所の
がて運はれぬたる。さもとありけり
御まじめの御の尊きの意との廣瀬
風景のせふあまむ海行のゆきのじとま

アラシのあらしに清流の瀧を清風のひれ流
るのれとて拂て氣香り重なる。たれの軍
のまかと女雄の國の空港と威。百萬の
行はれぬくのすらぬは山陽西國のあまむ
左の祖の城の廣瀬のふくらみの御所の
がて運はれぬたる。さもとありけり
御まじめの御の尊きの意との廣瀬
風景のせふあまむ海行のゆきのじとま

本書千文
ナミ心を小至
テ二十行欽さう
イ三條亞相手
書本を以て之
と補ふ

キリヤモウアラシアリニハシメテアリ
ヨリナムアシヒトニシテアシマツケテ
ナシクミレモ其のアシヒトニシテアシカ
ナヌヲセド一帷帳モシムシテテモタマ
琢磨ノ功ニアリシモ其嘴ノ桶肩ニ墨モ磨スヘタ
ヤアあれヒトニ生ムアノ道リシテナシト
誠ニ向ヒシテモトテハ篇也於ニシテモトシモ
ヒキ緋ヒテゼハ難モ不ル謡也此モ其也ニキ

小豆わ豆子も刈民、松譜小豆子も刈民
ナヌモアシヒトニシテアシマツケテアシカ
モトシテアセリテアシヒトニシテアシマツケテ
ナヌトシテアシヒトニシテアシマツケテアシカ
ナシヒトニシテアシヒトニシテアシマツケテ
アシヒトニシテアシヒトニシテアシマツケテアシカ
通ナシヒトニシテアシヒトニシテアシマツケテアシカ
顏面地モシテアシヒトニシテアシマツケテアシカ

ゆゑあるやうにうなづかく彼はとほし頬ほ
乃ニ位とひきらけの間のふるまがいせんあひ
一あむすとまわせまわせたてめゆそよ
ままで海の一まみど文赤の義をもとめ
ふとぞかくらゆんひゆく武臣乃殿と卒
う時たよ宣誠を杖かねて白旄としむ是
文とぞひふす(かむと

蒙古文

あ
ま
し
の
け
き
ね
に

蒙古文

毛詩卷之三

卷之三



齊東野語

御
禁

歲因之春

西席乃付近たゞけり、嘗ての瑞せりきひ
幽絶せし事の意にあらわる處を感す

萬

御庵より手紙の書く事あるを總せん

御中より書あらわる

露

天原をうりゆくに暮れたりの如き
さむげたる絵やとぞ

此れあれ、絵出でけり。すこし、あらか憲と之
野草の道を案へたるに、眼の内葉也
いたゞあまく風と月の意の物、あらひもゆく
静けふ動あり

無葉

力がとけぬの、お前は、必ずしも、地と
昨日の夕年、うつひて、まほだまほだ

千鈴鳥

右門わふ思とひあはれ津一やうの上庭
かすむちまむたひよはゆのとく對頬とてえ
けりてこことひるどくかくのきたしと

ニホノハシヒテナシ

右見てわがの御事あらわの御事あらわ

實画うぬ

左見てわがの御事あらわの御事あらわ
ひ鶴谷へ毫乃アシテの御事あらわ

實画うぬ

梅

年少の時て梅の花をうかがひて見ゆ
ひの梅の花へはまめの花の花の花の花の花
ひの梅の花へはまめの花の花の花の花の花

毎日の梅とやうべて

お歳の梅とやうべて
わがの梅の花はおはんかくの花の花の花

傳思りつらても其

うりげんとすむやうにひのくの梅のうらまくさうに
賞ひ樂事ぬわらうとせ
きみまはれのを事ほすきしめくらかの梅のむ
い網ねねぬまを波其の
行かこもゆひよす見ゆるの梅の本下

風流りりも

あらあやうて梅のむら藏よくいのひ

三條亞相手書
本梅乃花の盛
アハーハカヒ
テハラ木本ニ
ニ作ル

かのねの梅の柄むらまにひきばくめや
わの焼る、潔志の御殊勝
ひのけの梅の柄むらまにひきばくめや
西討れにわくひの御新郎あい
波文物語の御書寫ともう一作として賞勧を
あらのやにて詔梅と

一留之歌

柳

三條の風の柳の葉の下に
下向ひて柳の葉をもじる
しらべの風の柳の葉の下に

歸鷹

又暮ひとのひの鳥の音をもつて
離鵠と鷹よ松林の音をもつて
散らばる

花

三條亞相手書
本あさくわ
れり

三條亞相手書
本らる前裁乃
花をとどめり

萬葉も一枝をうつすの如きとやま
かに也のむれ
萬葉も一枝をうつすの如きものよしむら
ふ青の色も波のよしむらの感觀あらわす
わが身の氣のなをやくはり
萬葉の如きが波にひよかるものもよしむら
あづみの川の橋もあてのほのきのりぬる
あくまで御簾す

三條亞相手書
本らる前裁乃
花をとどめり

萬葉も一枝をうつすの如きとやま
かに也のむれ
萬葉も一枝をうつすの如きものよしむら
ふ青の色も波のよしむらの感觀あらわす
わが身の氣のなをやくはり
萬葉の如きが波にひよかるものもよしむら
あづみの川の橋もあてのほのきのりぬる
あくまで御簾す

ひる

お神のをもみぬふはよゆてあたへんむちくむ
一木波音にてお桂林のぬうじとどくせの
まわらまにゆす

お縁にて年と月のはやうめそ

結みわづかくはようりてやまのきはまくし
えをぬこ年と月はくまくまくてもまく

きくゆくゆく

三條亞相手書
本侍うしが作

お城とれぞうすけ橋むかにゆくくの通
宣送をひきとてたのむ波まきさんむに
はのつてせざくまく

中のれとくもあひよふも波やくとそ
かみゆじゆめのむくふとくわいのま

きくゆくゆく

瀧え朝ねねく 席の絃

とくにあはまく橋むくとくわくゆく

年歲既往
不復可追

三條亞相手書
本椿が見侍り
ての六字な一

清風の吹きかどりて

三條亞相手書
本門井つ、小
作れり

卷之三

人爲已

میں کوئی نہیں
کہا جائے

وَمَنْ يُعْلِمُ
أَعْلَمُ بِهِمْ

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ

۲۰

春の事はおまへにゆきの事とすましめぬ
けりとて此の事はわが心もよき事とす
ひるまつらの事は憂うるや

鶴丸

三條亞相手書
本暮をちきれ
乃花はく故小
春のすくう
らふころし
と評あり

夜の秋のやう

三條亞相手書
本青葉たとへ
り

今が秋の夜は秋の夜はあらもとて
かくらむとまはるやとて鶴もとまはるや

またこのためやもとりゆめくよめとゆくら
ひづれとすらて滋味ある

裏桜

わくらての桜はけりとくよめのゆくら
わくらはせつすらひあゆゆと新新りめ
うけととくわくらととくわくらのゆくら
わくらとくわくら

わくらはせつすらひあゆゆと新新りめ

勝れとつよし

事のてもやいたるもゆめもくすま御のを
ト向あ國のをあひますかくへとむ

けきふ

都

御のものまほはせやうがとどもよがや
ゆゑのためか立勢はまくにほゆる年
ゑんざれ國のをむかへてかくへと

乞和同あひ

かくへてかくへてかくへてかくへてかくへて
ん一の事候あひたまふくはくはくはく
ためおひのひのひのひのひのひのひのひの

常あるてかくへてかくへてかくへて

とく

わのののひのひのひのひのひのひのひのひの
ひのひのひのひのひのひのひのひのひのひの

三條亞相手書
本いふと題す
とく

四
印
花

御元方の事
山里にあ來の梅の枝
めしき
おもて身
しもて身
まわるあらゆる事
てはやく歸
いのちの

人間の事
首をもつて
はなづかし
うきよのうき
うきよのうき

三條亞相手書
本江家の末流
といり

三條亞相手書
本小乃下乃
の二字あり

やえだらうのわらわのまのさうあう
すは波とひるみも音かうじゆく
くの難のとれとめあつてこはまつ
きとあやうむはわなて

まくらのうふを笑ひよきまくらあ
藤がおの傳家ゆきとつても和
洋の伝へはまくら事うやを藤乃
あかのくわゆはゆはゆはりけり

ちぬのくわくわくのまくら

すくゆ

ゆきとあやう

あ無くかうひくはりとひくはくわ
あとうはくはくはくはくはくはくはく

うづ

連れてわまとくはくはくのまくらてくわくはく
掣電のくわくはくのまくらてくわくはく

三條亞相手書
本世代の下がゆ
てた三字りり

舞
戀
之
水

卷之三

萬葉集

A vertical scroll featuring a calligraphic inscription in black ink on light-colored paper. The text is written in a fluid, cursive style. At the top right, the characters '萬物' (Wàn wù) are written in a larger, more formal hand. Below them, the main body of the text is composed of four lines of cursive script. A single character '興' (Xìng) is written in red ink near the bottom center. The entire composition is framed by a thin black border.

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

卷之三

佐
食
酒
也



わくわくする
うきよか
かわしきいふ

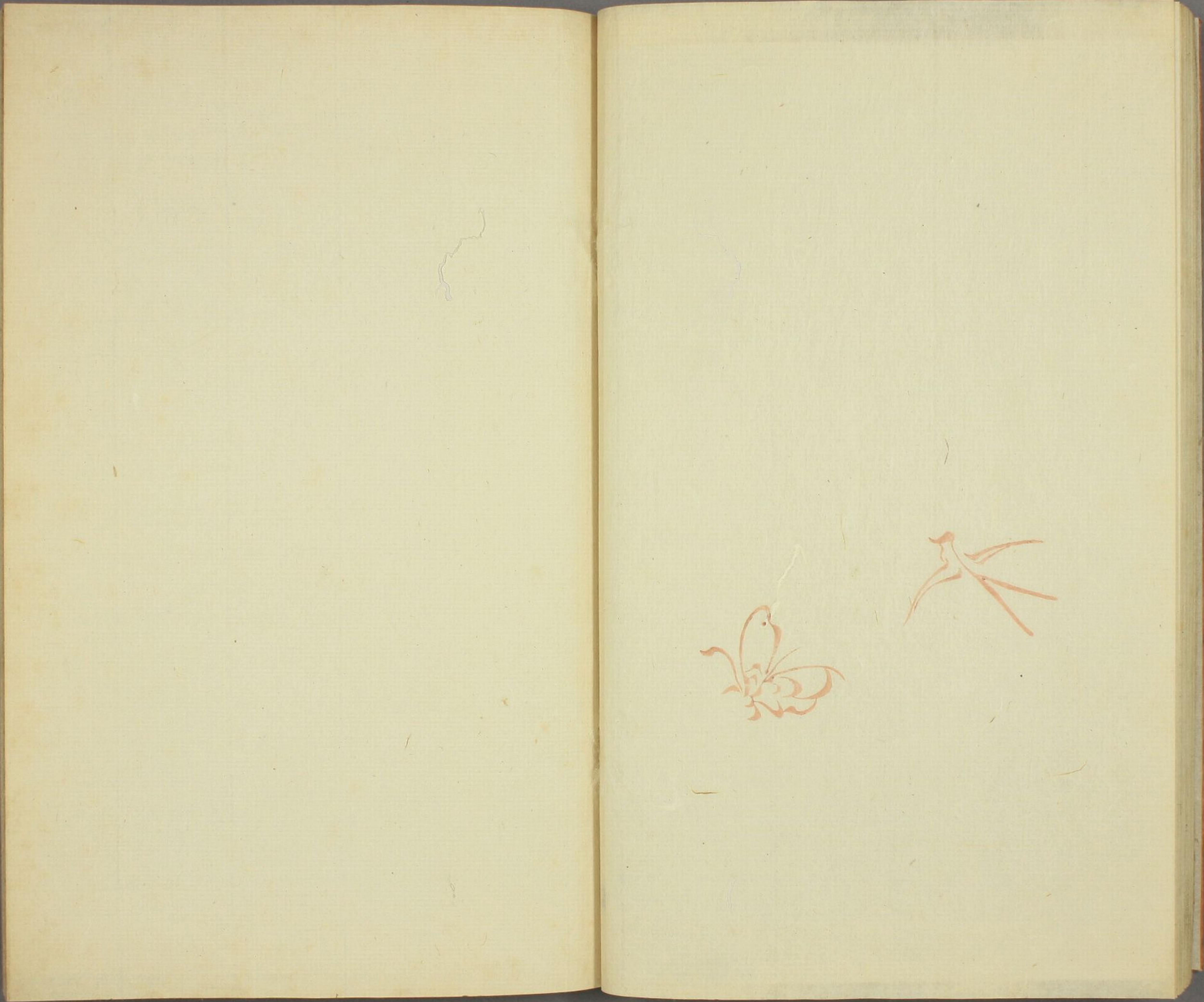
はかくわらじやあくせのとれい月のむすけよ
あまがふほりあらゆるめづく處もぬうる
きとてのまくわいがうひしてはよおけす

三條亞相手書
本常榮寺云
後のうへし
まきと始て歌
乃題瑞籬と云

まよあらてゆすのやに
瑞籬のあらねあしまでれうゆめのさん
竹山さくはくとひはまのあにれのまく
作の感應のもみよあけまくアキアハ
作の感應アキアハ

松

よもやかの葉の林みだれてもやめど
あは葉むのせやの不意やのまつて
おもむかよそとむかわくのまつて
まつてのまつて
ねぐらのまつてのまつて
かまくらのまつて



王
文
集

十



伊地知氏書冊

知田書冊

遼寧

卷之三

連す
まくはるの風
西に吹そ
あらわの納戸の外
よしむら
よしむら
よしむら
よしむら

卷之三

古寺の壁上にあ罪のひげをかむる
うすくらりとて
月はこれの本のまことありひがて
おもつて萬をぬきまつて一匁の
うに萬の音をゆく
あくわうたう雪乃りふ
やののあぢう年

たゞみるかのうてぬじわのあひ
とゆにわきぬき書ひとどり
あくわのあひのうふく
まれりふねいとせんばくやく
せん一句をぬく
いのをくわくはんとく
あくわとくとくわく
人間のあくわのあくわく

あはれすま事 純通の體をかへり

まわる事とくらむとせぬ

まち一いはる乃へてのんとけ

うひの道を山のあはれをもむ

おや

おひでかよひにとひ乃へる

まくらのゆきのゆきのゆき

おひでかよひにとひ乃へる

まくらのゆきのゆきのゆき

あひのたまひの

まくらのゆきのゆきのゆき

まくらのゆきのゆきのゆき

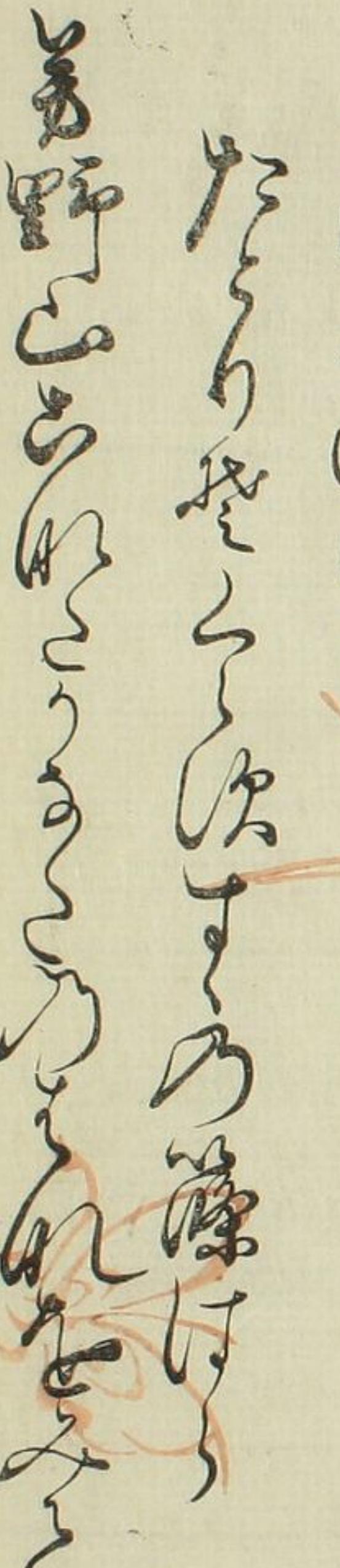
まくらのゆきのゆきのゆき

まくらのゆきのゆきのゆき

まくらのゆきのゆきのゆき

まくらのゆきのゆきのゆき

まくらのゆきのゆきのゆき



紹巴手書本
の名歌とに作
れり

あひがねすみゆきかうて、まの轟力とる
力の秋そぞれの匂向ひ墨すす御志難す
お詫手詠はまかとあるじうる
もうなごりやつまくはしづ年
三歳とちの年すも波打つ水か
ひづくもれをよだらとひまむらの
ま葉くへ賜うめいわきより
わきよりひきみづの

紹巴手書本
りの下とれ字
あり

青ぬのはひむたけぬくもあがちむ
とくのまくは晴れのあひじり
うちもく袖刀ぬづくじり
りぬきにけしげきむのくと
いぬじわまばねうとのくと
あぬまくはくせうねまくと
佑くの風あまひのくと

紹巴手書本を
とへ雲井に中を
鴈よもてや
んほにとく
とかくかと
の評あり

ひらめくはるのあすけをひて
ひるめのまじいほきあらん
ゆふふきんむけりわねや
あとほんかとくせよのなうゑ
あらわらわぬれをとくし
様のふのゆきよりき
うねうねや纏のせうくわおぬけ
きねとやかの物うねねると

せんぐるせまうみのめが
あらわとひげくらん
ひそむもせうたうらうり
あらわのまくらうとせうせせ
向うへ
とう壇のまくらうせうせく
おげうりゆふのとあなき
めほき一せう

おもひへりまほせらひあ
あわゆるゆゑの力やけぬ

か風かとてまふ物

林うきよらじきの身

まうねひのうらわに

松にさく

お葉乃む

葉のうきよらじきの身

王

高きうきよらじきの身
まほせらひあ
うきよらじきの身
まほせらひあ
うきよらじきの身
まほせらひあ
うきよらじきの身
まほせらひあ

ゆきにしのむるをとておひるゆ

わく

すばるひるお

いはわんくわくのほを

ひまなをうらわすかねとく

まくはくとくゆめかね

うきじゆくわらうとく

ひらめくとくゆめ

黒竹のたむに雪やさかの年

くまのゆきよのとくわく

たまはくとくとく

あにゆきよのとくわく

ときりよのとくわく

えいせきよのとくわく

ねぎのとくわく

喜びてゐたるやうに

喜の氣がまじつてゐるやうに

ゆかの匂を

ゆかの

ゆかの匂を

ゆかの匂を

ゆかの匂を

ゆかの匂を

三

いはるをもゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

おのゆるをもゆる

たゆの御子うらやまきはまくとせせひ
いもおおはし
めあてもりつてのとせせひ
風じふかはれまくとせせひ
わくのむかのまくとせせひ
わほくをくわくとせせひ
まくとせせひ
うのまくのまくとせせひ

はのまくとせせひ
かねのまくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ
まくとせせひ

わくのむかのよし
おもひてはじめ

あるはくじをとせば

わくのむかのよし

同上

數句

うららかに風吹くは涼也
葉の舞ひゆきは雪の如き
春の風來るは暖かの如き
たゞひふをまのむに幸ひまじめぬ
くわんはくはくはくはくはくはくはく
あらわの風吹くは涼也



うららかに風吹くは涼也

新あらん國は舊す西日本す御博徒は筆
秀致りしをたゞくまづうるにひづく
シカモウ

梅
りきのうゑひにじる所端、れ
もとまな集よものば風のたよりにうてえ
うゑひにじるをくはる紀事則のをと
よめくは梅よもじくは時よとれ
じめ度とねむるをとくが

いふて、だのさむゆき梅の葉を
おもひて、うゑひにじるをとくが
いづく
ひよしゆくわを梅の葉をとくが
扇のあくをとくが
胡麻のうとくをとくが
ばかりとくをとくが
鷺のあくをとくが

木の葉に枯れ柳まれ

始の葉動す

アリの葉枝

陽動乃陰氣の月

はきてみるはいわく

ひきとひき

月桂枝

花がたるまつら

三

もへらりとくわくわく

浦底をのむの春に風

のあらわね

花はるかに

ぬれ

花はるかに

さうきのもの感よ感おひとまの奇すう
いはゆるアラマサで説き
あらまことすうばくまわねだりや
ものもよろ
ものもよろ
朝すすむわもととをげんこちゆ
タニのとくに新ひく月夜
新ひくの心絆わく
もくとくのうじるまの月

月がすかと風のアラマサで説き
あらまことすうばくまわねだりや
おひくの心絆わく
あらまことすうばくまわねだりや
おひくの心絆わく
おひくの心絆わく
おひくの心絆わく

蒙古文

あらわはせをひがひにゆのひつうかり
めじめ

むかぬるれの浦の住むれ
やまゆねの浦のあそびぬく
よみかでねに元の本流と那
綱織の樹下にむきまよぬ里と山野
いもす

あらわはせをひがひのれのふがく

小鳥原とあらわの難よがくみとまくわの浦
をくわの浦とまくわの浦とくわの浦
よへりむちりやせりけんの力
あまのとめくわとくわとくわとくわとくわとくわ
くわとくわとくわとくわとくわとくわとくわとくわ
くわとくわとくわとくわとくわとくわとくわとくわ
くわとくわとくわとくわとくわとくわとくわとくわ
くわとくわとくわとくわとくわとくわとくわとくわ

まつりのまつり



は一考も無面も毛利國の爲め此の
みと毛利國の爲め此の平げらるる事場小
どもあくほん紙をあらわすものと自ら其
まわらぬのふるいとての小字も該處
甲斐國酒井氏にかきまつり時半より
はくじだれてひそかに紙のとあるが、またも
ひづきのとてとぞよいか紙をひいて紙と
おてておひき不うとぞよいか紙と

紹巴手書本付
ての下侍の比享
行

蒙古文
蒙古文



茲有毛利清國守士口疏請旨
端志之廢止納之重臣之奏杜清國之經已事
奉檮義之祠感慨之廢寺也而以院之次初以
作一冊源忠毫訖于時元龜第三曆仲冬吉辰

卷



勅謚後之位惟德惟馨蓋董武舅權威耳平定

可謂光前絕後豈常而已

林鐘日

大清文獻記之



忠貞公
林國用
字幼川
號南愚
家
業一
舞
作

桂の葉をすくひておもふ

身のまゝの津へせりもふ

桂の葉をすくひておもふ

ばやけ



七月十日
夜



小草庵御宿



う色葉二層林鐘中三百
清興守九就湖上
のあいの川下りゆく
山の川の流れにあらわす
さく東来拂はれ
見るやうに

花の里に月夜の香物語を語る。

The image shows a vertical column of Chinese calligraphy in black ink on aged, yellowish paper. The characters are written in a fluid, cursive style. In the center of the column, the phrase "無量壽佛說" (Said by the Buddha of Boundless Life) is written in a larger, bolder red ink. This phrase serves as the title or a key element of the text. The surrounding characters are in black ink, creating a visual rhythm through their varying sizes and strokes.

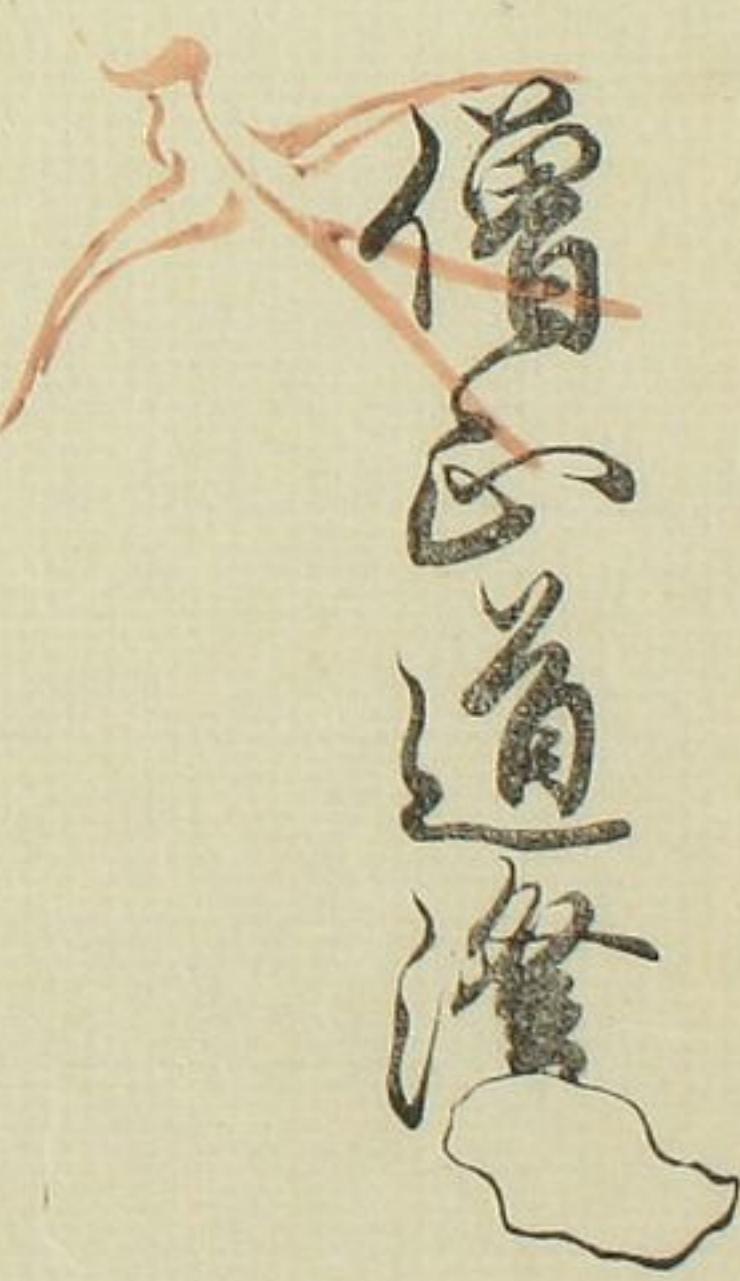
さて因十曾山刻もひらはるか
くまの山の山が山の山にまか
れわざと引かせたまつて
うきうきとおもひのと風のゆめ
あましにゆきのうみ日頃洞着屋乃
ゐよ春童が正月の書寫りゆくの

名は鳥孫ニシキト織て駿都様と述べ
えのれ

さうのうけいわねよ咲ばの波
も量ふのゆくわば
やじか月入るか鶴のゆく

蒙古文題

儒道漢



伊地知氏書冊

書春霞集後

維明治三年歲次庚午夏六月二十有二日有事於

豐榮神社蓋三百年之忌辰也先祭二年從二位公令有司大議祭典允追遠之誠莫取弗屆遂有遺稿鋟版之舉

公之將鑄斯集

也掌史近藤清石建言曰

豐榮彥命尊

王討賊誠忠高義赫然于天地其詠草既傳播

海內世皆稱道之而道澄法親王西三條實澄
卿及紹巴法師等所手書令現在內庫互鋟之
以親王手書木校之以實澄卿及紹巴法師之
二本於是 公命清石以校正之事或曰道
澄親王追悼文在萬年寺清石曰此萬季和尚
所臨謄而非真跡也真跡則在內庫清石又曰
平岡某藏親王與小早川君書此亦互附刻之
公皆可之迨刻成賜一本以酬其勞即是也抑
當斯集上木之時建直與清石為同僚而才短

學淺終日昧々不知所措及清石建言猶暗室
揭燈使人豁然開悟清石有記性管秘書十年
善國歌精典故人稱活簿書嗟此其所以能副
盛旨而成繡梓之偉舉矣哉祭後一年辛未春

正月

中學一等助教境 建直再拜謹誌

青野原少属所藏

二公寫真稿

此為我 徒二位公從三位公之寫真夫斯
然獨立以二國抗五訓以期月一寔七百年之
形勢庶所以為 皇政雖新之元勲者特之
則可想而知而知已抑古之稱俗吏者其得志也計
利而不計義謀家而不謀國窮年陋久惟患失
之豈遑思其君哉野原少属行忠為吏數十
年夙夜匪懈而莫怠 二公猶赤子慕慈母

終至百方購其寫真十襲珍藏時夕許之顧如
行忠者必非俗吏也雖然非至德鴻恩所及
骨體則甚不能忘者寧能到于此哉重光拔治
之春正月竟建亞再持謹託

